

## 難波宮の瓦の物語 — 後期難波宮と吹田 —

村上 正 (正会員 CVV会員)

難波宮造営は巨大土木事業であった。後期難波宮は瓦で葺かれており、その瓦の主要部は吹田で焼かれていた。難波宮の発掘調査とその発見は、わが国古代史上、また土木史上非常に重要な発見であった。後期難波宮の瓦の主要部が吹田の七尾瓦窯で焼かれたという事実は、難波宮の存在を確実なものとした。また、大都市中心部にあったこの大遺跡の保存・維持には、都市計画上、大変な苦労があった。

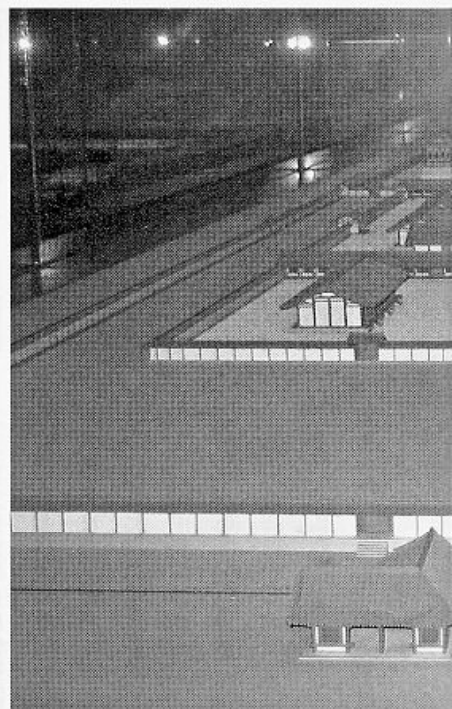


写真1 後期難波宮イメージ模型 (提供:大阪歴史博物館)

### 難波宮

大化の改新の後、孝徳天皇は、645(大化元)年に飛鳥から難波(現在の大阪市中央区)に遷都され、難波長柄豊碕宮と称された。この宮殿は本格的な中国風の宮としてつくられたが、建物は掘立柱で屋根は瓦を葺かない草葺屋根であった。654(白雉5)年に孝徳天皇が難波長柄豊碕宮で亡くなられ、都は飛鳥に移され、政治の中心はまた飛鳥に戻った。この難波長柄豊碕宮は前期難波宮であると考えられている。その後、大津宮、飛鳥浄御原宮、

藤原京へと移っていくが、難波長柄豊碕宮は廃止されることなく維持されていた。その後、壬申の乱後、天武天皇は難波に摂津職を置き、難波の宮の維持・管理に当たらせた。しかし、686(朱鳥元)年に難波宮の「大藏省」から出火し、宮殿をことごとく焼き尽くした。724(神亀元)年に即位した聖武天皇は726(神亀3)年に藤原宇合を「知造難波宮事」に任じ、難波宮の「再建」に着手した。その時の技法が中国の技法の礎石建、瓦葺屋根であった。744(天平15)年に遷都されるが、翌年745(天平16)年に難波宮から紫香楽宮に遷都された。



わが国最初の造宮瓦づくりは、藤原宮造宮にかかるもので、その後平城宮期の前期にもある。後期難波宮(写真1)に瓦が用いられたことは当然のことであるが、たつた百年足らずで、瓦を用いることは大変なことであつたと思われる。瓦を用いると荷重が大きくなり、そうすると柱も太くなり、そして基礎もしっかりせねばならず、その技法は中国から来たといわれるが、日本での技術向上は大変なものがあり、建築学的にも、土木工学的にも非常な進歩があつたと想像される。

### 難波宮の発掘

「日本書紀」、「続日本紀」、「正倉院文書」、「万葉集」には、高津宮のほかにも応神天皇の大隈宮、欽明天皇の祝津宮、孝徳天皇の長柄豊碕宮、聖武天皇の難波宮について

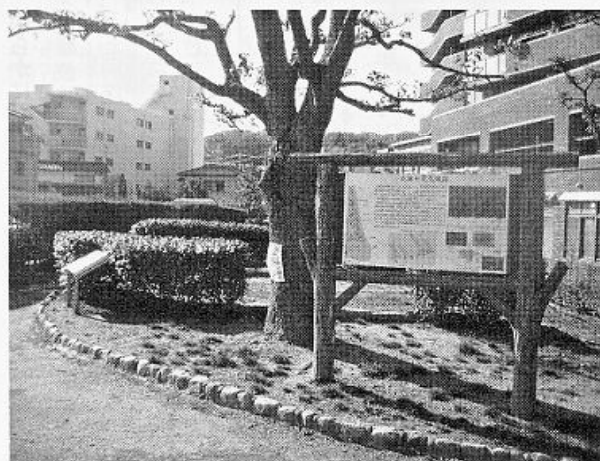


写真2 七尾瓦窯跡。七つの瓦窯跡が発掘されたが、その一つには、まだ焼かれていない瓦がそのまま残されていた

の記事が残されているが、それらが大阪のどこに位置していたかということとはまったく謎につつまれていた。1913(大正2)年に大阪城南の東区馬場町にあつた当時の陸軍被服支廠倉庫の建設工事において、蓮華文・重圓文軒丸瓦が出土し、難波宮が上町台地にあつたとい

う有力な証拠となり、その後の難波宮の研究の糸口となつた。1934(昭和9)年以降、30年余りにわたる発掘調査の結果、東区馬場町・法円坂1丁目二帯に、前期・後期の2時期に分かれる宮殿遺跡が発掘された。後期難波宮は重圓文軒瓦や蓮華・唐草文軒瓦など、奈良時代の瓦と、奈良時代の尺度で設計・造宮されていることから、藤原宇合が宮殿造営に当たつたと考えられている。その後、山根徳太郎氏の非常な努力によつて、1961(昭和36)年について難波宮の大極殿が発掘された。



写真3 いまだに残る里山、紫金山古墳群の中にある吉志部瓦窯群跡と吉志部神社。吉志部神社の本殿(重要文化財であつた)は2008(平成20)年に全焼した

後期難波宮の出土瓦の約90%が重圓文軒瓦で、難波宮近くで焼かれたと考えられるが、蓮華・唐草文軒瓦は吹田市岸辺北五丁目目で発掘された七尾瓦窯で焼成されたことがわかつた。このことは、後期難波宮の実在を非常に明確にした。

### 七尾瓦窯跡

七尾瓦窯跡(写真2)は、吉志部瓦窯跡群(写真3)の東方約200mにあり、当地の洪積丘陵が東に延びきつたところで、窯の開口方向が逆の北向きであつた。吹田市教育委員会が1979(昭和54)年に発掘調査を行い、7基の瓦窯跡が



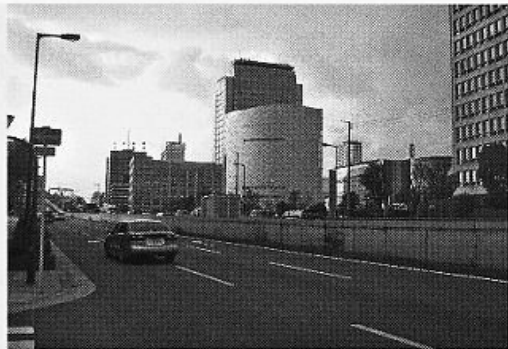


写真4 難波宮遺跡の現在の全容。中央に都市計画道路中央線と高速道路が走っている(右)



写真5 難波宮遺跡を平面道路構造で通過する阪神高速道路と、向こうに移築されたNHK大阪放送局と新しく建てられた大阪歴史博物館が見える。この下に、難波宮跡の主要部が眠っている(左)

明らかになった。その出土瓦が、後期難波宮出土の蓮華唐草文系軒瓦と同範(同じ鋳型で製造されること)であることが判明した。この調査によって、従来不明とされていた聖武朝難波宮の造宮瓦窯の一端を明らかにする新知見をもたらした。調査終了後、1980(昭和55)年3月24日付けで国の史跡に指定され、現状保存されている。

後期難波宮において用いられた瓦は、大別して大極殿など重要建物には蓮華唐草文系軒瓦が用いられ、一般の建物には重圓文系軒瓦が用いられた。その比率は1対9といわれている。七尾瓦窯跡では、その約10%の蓮華唐草文系軒瓦のみが焼かれ、そのほかの瓦は他の場所でも焼かれたようである。そして、これら瓦は先に述べた須恵器窯を併用はしてなかったようである。ただこのような国家事業をするためには、須恵器を焼く工人が多数いるこの地を瓦を焼く地と定めたと推定される。また、吹田のこの地は神崎川に面した船着場を有し、水運により、吹田から神崎川、淀川を通じて瓦を運搬したと考えられる。その後、神崎川から淀川へ直接抜ける運河が開設された。しかし橋梁の技術はまだまだ未熟で、長岡京

平安京の造営の時期までつくられなかった。吹田の窯業の技術は後まで引き継がれ、平安京の瓦もこの地で焼かれることになる。

### 難波宮造営とその周辺

難波宮は上町台地の北端に造営された(図1)。当時の上町台地は大阪湾に突き出した砂洲のようなもので、東西約1kmから1.5kmで南北に伸びており、西は今の大阪湾が迫り、東は河内湖があり、北には難波堀江と呼ばれる今の大川があったと推定される。

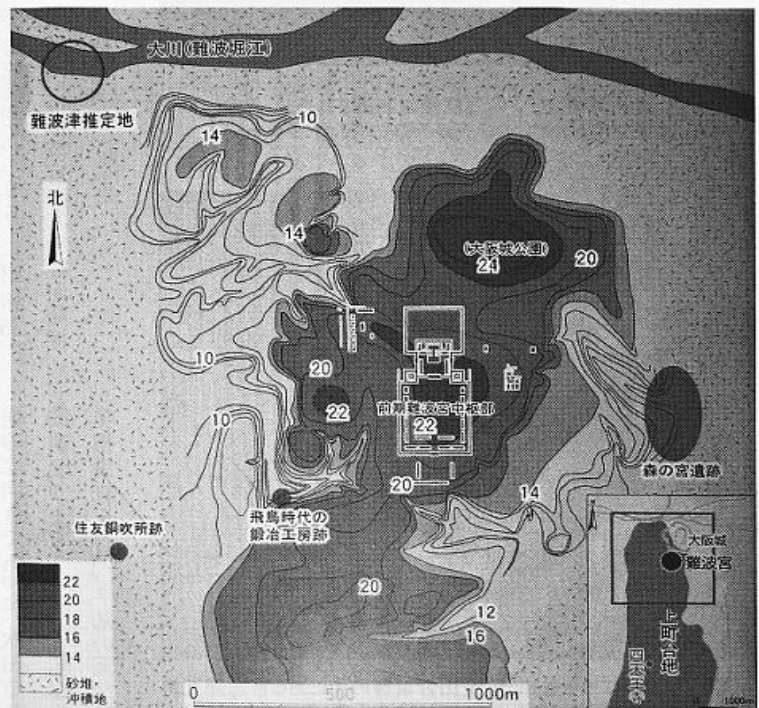


図1 難波宮造営時の地形図(提供:大阪歴史博物館)

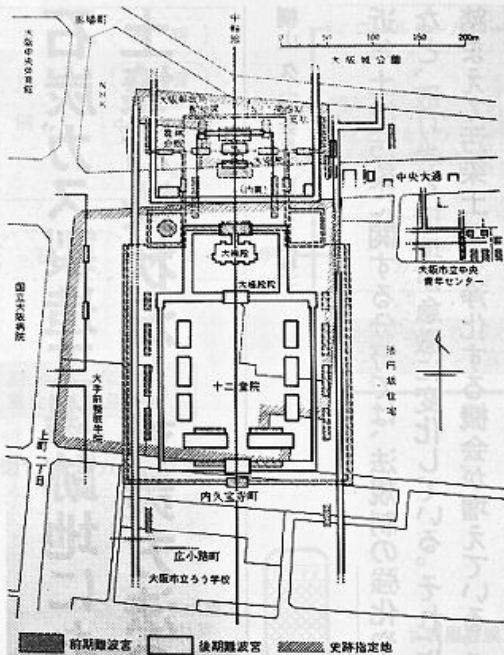


図2 難波宮内裏・朝堂院の復元略図(大阪市史第1巻より)、難波宮と中央大通の関係がわかる、またNHKは移設されたが、その他のビルはまだ残っている

古代の日本の都は、その後でできた藤原京や平城京のように、都全体が碁盤の目のような整然とした道路によって区切られている。その中央には壮大な宮殿が並ぶ「宮」があり、「宮」の周辺には、都に住む人のための生活空間があり、これらはまとめて「京」と呼ばれている。この碁盤の目のような都市計画が「条坊制」と呼ばれるものである。藤原京以前の都であった飛鳥には、これら整然とした都市計画があったという痕跡はない。それでは、飛鳥と藤原京の間に位置する難波ではどうだったか。現在までのところでは、まだ明瞭な条坊は確認されていないが、今後の難波京研究の大きな課題であるといわれている。これらのことが解明されてくれば、わ

が国最初の大都市計画が計画されたといえる。

### 難波宮の保存と都市計画

大阪市は「難波宮跡と大阪城公園の連続」一体化構想の一環として大阪中央体育館跡地にNHK大阪放送局の新放送会館と一体となった大阪歴史博物館を建設し、2001(平成13)年に開館した。写真4は中央大道より、南部の地域を整備したものである。この大阪歴史博物館の敷地の南側に、大阪市の最も重要な東西幹線である中央大通(築港深江線)があり、その上には阪神高速東大阪線が建設されている。現在、この高速道路を見ると、西から馬場町の交差点ま

では高架構造になっており、そこから急勾配で平面におり、300mほど行つてまた高架構造になっている。明らかに、難波宮の重要部分は、遺跡を保護するために、杭を打たない構造となっている。これは建設当時いろいろ検討され、この部分をう回するか、遺跡の下をシールド工法で通すか、長スパンの橋梁にするかが検討された。う回案とは高速道路をう回させて、難波宮の重要部を通さないという案であるが、それは大阪城の北側か、四天王寺の南側を通さなくてはならず、まったく不可能な案であった。地下をシールドで通すという案は、すでにそのとき、地下鉄中央線が地下にシールドで通っており、その下を行くということは、構造上もできることではなかった。長スパンの橋梁にする案は吊橋構造などになり、都心部の景観上考えられる案ではなかった。そこで結局、遺跡を乱すことなく、平面を舗装するだけの案が採択された(写真5)。

大都市中心部の巨大遺跡(写真6)である難波宮、その上には、大寺院、城郭が建てられ、いく度もの戦乱の中に立たされ、その後、都市化の波により市街化され、その発掘

調査は困難を極めた。しかし、一枚の瓦から調査の端が発見され、さらにその瓦と同範であると考えられる瓦が吹田市にある七尾瓦窯跡に見つかり、この遺跡の存在が確定された。このことは土木史的にもわが国最大級の発見であったといわざるを得ない。そして、この遺跡を保存するためには、まだこの遺跡の最重要部に、いくつかの建築物が残っており、その処理についても考慮されるであろうし、難波京としての発掘も続くであろう。

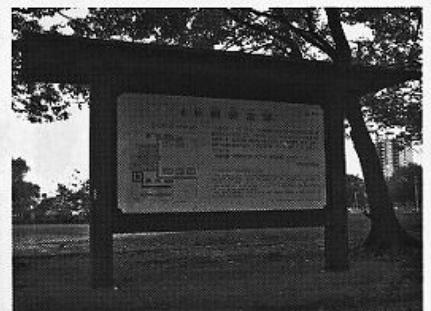


写真6 一部整備された難波宮遺跡

参考文献

- (1) 新修大阪市史編纂委員会・新修大阪市史、第1巻、1988年3月31日発行
- (2) 吹田市史編纂委員会・吹田市史、第8巻、1981年3月31日発行
- (3) 大阪歴史博物館・展示の所見10、難波京、2005年3月発行